

第8章我が国における「インターネット依存」に関する研究と文献資料

早い時期から「インターネット依存」が問題視されたアメリカ、またブロードバンド化が急速に進行してPC房が国内のいたるところに見られ、とりわけ青少年の「インターネット依存」が社会問題となっている韓国に比べると、我が国の「インターネット依存」研究は、まだ端緒についたばかりである。また、刊行されている文献、学会等で発表される研究発表も、いまだ数えるほどであり、多くはアメリカの研究報告の紹介、一部のアンケート調査にとどまっており、煽情的な啓蒙書がその存在を声高に唱えているに過ぎず、実態はほとんど藪の中である。ここでは、そういった現状を踏まえながら、我が国の現状について検討してみたい。

1. 「インターネット依存」をめぐる報告

まず川浦（1997）は、比較的ネットワークが整備された大学においてネットワークの実態調査を行い、チェックリストによる調査で、重度の「インターネット中毒」者は、0.6%であったと報告している。恐らくこれが、「インターネット依存」をめぐる調査の中で、もっとも早い時期に属するものの一つであろう。それを受けて岡田（1998）は、「インターネット中毒」の心性について論じ、臨床的研究の必要性を高唱している。また、いわゆる一般啓蒙書ではなく、比較的専門的な心理学の立場から「インターネット依存」を取り上げている成書は、現在のところ『インターネットの心理学』（坂元章編）のみである。その11章で小林（2000）はインターネットと社会的不適応を論じ、先述のヤング（1998）を始めとする一連の欧米の研究を紹介している。これもあくまで紹介論文であるが、上記の研究グループは、小林ら（2001）を中心に「大学生のインターネット中毒 中毒症状の分布と関連する要因の検討」というタイトルで日本心理学会において調査報告を行っている。

これを受けて和田（2002）は「インターネット中毒」を上記の小林らの尺度で調査し、依存のレベルにあるものは4%（16人）という数値を得ている。また、我が国では欧米に見られるようなタイプの「インターネット依存」よりも、むしろ携帯電話の普及によるメール依存が問題になろう、と警告している。

2000年には「インターネット社会と心の健康」と題するワークショップが日本心理学会第64回大会で開かれ、シンポジストの島井（2000）、安藤（2000）らが中間報告としてインターネット使用と孤独感、社会的効力感などとの関連を確認している。実質的に現段階で

我が国の調査研究はここまでにとどまっており、その他は一般啓蒙書による警鐘がほとんどである。

参考文献

- ・川浦康至(1997) 学生のネットワークコミュニケーション行動 平成9年度情報処理研究会講演論文集 203-204
- ・岡田努(1998) はまる インターネット中毒 「現代のエスプリ」370号 167-176
- ・小林久美子(2000) インターネットと社会的不適応。坂元章(編)『インターネットの心理学』学文社、122 134
- ・小林久美子・坂元章・足立にれか・内藤まゆみ・井出久里恵・坂元佳・高比良美詠子・米澤宣義(2001) 大学生のインターネット中毒 中毒症状の分布と関連する要因の検討 日本心理学会第65回大会発表論文集 863
- ・島井哲志(2000) 否定的な影響への懸念とその研究方法、日本心理学会第64回大会ワークショップ報告
- ・安藤玲子(2000) インターネットによる新しい交友関係の構築と人生満足感および社会的効力感、日本心理学会第64回大会ワークショップ報告
- ・墨岡孝(2000) 『「パソコン病」に負けないで』毎日新聞社
- ・墨岡孝(2002) 「情報化が子どもに与える影響」に係る墨岡院長ヒアリング結果」

2 「インターネット依存」に関連する文献

調査研究ではないが、いわゆる精神医学的な依存の見地から、「インターネット依存」を取り上げて注目しているのが墨岡(2000)である。彼は自ら開業するクリニックを訪れる患者の一群に「インターネット依存」を見出し、月当たり中学、高校生の新患で3~4名、大学、社会人で15~6名という数値を掲げている。彼によれば、ネット依存になりやすい子どもはパソコン好きで論理的思考が得意、几帳面で非社交的な子が多い、としている。対策としては時間制限をしていくことで、3ヶ月程度で改善が見られるという(墨岡:2002)。

その他、我が国で翻訳が出されている「インターネット依存」関連文献は以下の通りである。

- ・シェリー・タークル(1998) 『接続された心』(日暮雅通訳) 早川書房、
- ・キンバリー・ヤング(1998)(小田嶋由美子訳)『インターネット中毒 まじめな警告です』毎日新聞社

- ・ J.C.ハーツ (1996) (大森望・柳下毅一郎訳) 『インターネット中毒者の告白』 草思社
- ・ クリフォード・ストール (1997) (倉骨彰訳) 『インターネットはからっぽの洞窟』 草思社
- ・ ジェーン・ハリー (1999) 『コンピュータが子どもの心を変える』 (西村辨作、山田詩津夫訳) 大修館書店